

## 重点行動の観察と記録

### 対象

Sくん（5才11ヵ月 男児）

### 観察する行動

セラピストを叩く、蹴る、つねる、ひっかくという行動（以下、『他害行為』とする）

### 介入方法

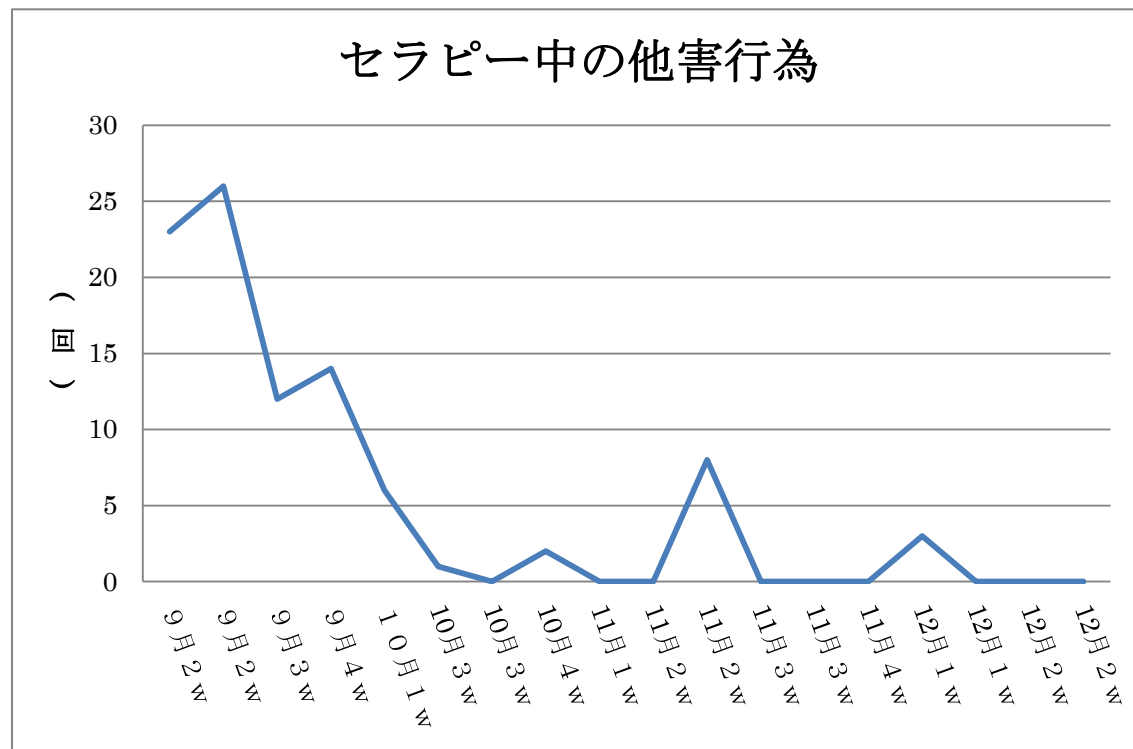
セラピー中、他害行為が起こる直前に「手はおひざ」の指示を出し、手をひざに置かせる。又は、他害行為が起こった直後に「手はおひざ」の指示を出して制止し、すぐに課題を呈示する。

### 観察期間

2014年9月8日～12月11日

### 結果

介入前は2時間で20回以上起こっていた他害行為が、介入後減少した。11月2w～12月2wのひと月間をしてみると、2度を除いては他害行為は皆無である。他害行為が起こった日も、11月2wは8回、12月1wは3回と、回数は減少傾向にある。



### 考察

セラピー中、他害行為が起こる直前に「手はおひざ」の指示を出したことで、他害行為が成功しなくなった。それにより他害行為をしようとする行動が消去され(？)、減少したと考えられる。

また、他害行為が起こった直後に「手はおひざ」の指示を出して制止することにより、他害行為で注目を得ることによる強化や、行為自体の感覚刺激による強化も得られなくなった。そして、制止後すぐに課題を呈示することで、課題の開始が遅れることによる回避としての他害行為の機能も失われたため、行動が減少したのではないと思われる。

今回の介入前は、無視することによる消去や、手を払ったり掴むなどの身体接触を伴う物理的な制止を行っていた。しかし、無視による消去では、回避という他害行為の役割を無くすことができず、身体接触を伴う制止では、その身体接触が強化になってしまっていたために逆に行動が増加していたと推測される。

以上のことから、今後もこの介入を続けていくことが望ましいと考えられる。